報 道 発 表

国立大学法人
浜松医科大学

令和7年 12 月 24 日

人生の最終段階における医療やケアについての話し合い（人生会議）に市民は積極的
～浜松市でのインタビュー調査報告～

＜研究成果のポイント＞

- 人生の最終段階における医療やケアについての話し合い（通称：人生会議）について、**多くの市民は「元気なうちから」「家族と話し合うこと」に前向き**でした。一方、「忙しい医療者が時間をとってくれるのか」、「施設間で情報がきちんと共有されるのか」、など**医療側の体制への懸念**も聞かれました。
- 医療者の視点から話し合いにくさが指摘されてきた人生会議ですが、医療者から市民への情報提供はもちろんのこと、介護や看取りの**経験からその必要性を感じている市民を語り手とした市民同士の対話の場づくりなどを通じて**、元気なうちから話しやすい環境を作ることも効果的と考えられます。

※本研究成果は、**学術誌 Journal of General and Family Medicine** に **11 月 29 日**に公表されました。

＜概要＞

本学地域家庭医療学講座の井上真智子特任教授らの研究グループは、浜松市で開発された「人生会議手帳2」を用いて、人生の最終段階にある方と治療やケアの希望を話し合っていく方法について一般市民を対象として意見収集を行ないました。多くの市民はそのような話し合いに積極的で、もっと広報するべきという反応を示しました。一方で、話し合いのタイミングや医療者の関わり方については様々な懸念や要望も聞かれ、この取り組みについて市民と医療者、また市民同士でも対話を重ねることが重要と考えられました。本研究は学術誌 Journal of General and Family Medicine に 11 月 29 日付で掲載されました。

＜研究の背景＞

日本では2017年以降、厚生労働省の主導のもと、各自治体が「人生会議」（アドバンス・ケア・プランニング/ACP の日本語の愛称）の普及を進めています。「人生会議」とは、「もしものときのために、あなたが望む医療やケアについて前もって考え、家族等や医療・ケアチームと繰り返し話し合い、共有する取組」のことです。しかし現状では、医療者への研修は進んでいるものの、一般市民の認知は広がっていません。そのような中、2024 年の診療報酬改定で入院基本料において適切な意思決定支援の指針作成が義務化されました。人生会議の実践を進めるには、医療側の体制作りだけでなく、本来会議の主役となる患者側の理解を促すことも喫緊の課題となっています。

本研究では、浜松市が新たに開発した「人生会議手帳2」を用い、市民 15 名を対象に、人生会議のコンセプトや進め方を詳しく紹介した上でグループインタビューを実施し、参加者の意見や期待・不安を聞き取りました。

＜研究の成果＞

多くの参加者が人生会議について「健康なうちに家族と話したい」、「この手帳は会話のきっかけになる」、「もっと活発に市民向けの広報を行なってほしい」と前向きな姿勢を示しました。一方で、「医療者は忙しく人生会議に時間を割けないのでは」、「話し合いを始めるタイミングの配慮や、その後の丁寧なフォローが必要」、「医療施設間で意思が共有されるのか」といった懸念も挙がりました。

さらにグループインタビューの中では参加者の個人的な体験も多く共有されました。例えば、医療者と話し合いを重ねて納得のいく形で配偶者を看取れたこと、終末期の治療について本人（親）の希望が聞き入れられなかった悔しさ、亡くなった家族ともっと話しておけばよかったという後悔などについてです。そのような実体験と人生会議の意図が結びつくことで、元気なうちから話し合っておくことに対して積極性な姿勢が引き出されるものと考えられました。

これまでの人生会議（ACP）の研究では、医療者側の視点に基づいて、患者や家族が話したがらない印象を持っていたり、終末期まで話し合いを遅らせたりする傾向が指摘されていました。今回は、比較的元気な一般市民の視点から、忙しい医療者の時間をとることに遠慮してしまうという発言も聞かれ、双方の間で「こちらは実施したくても、相手が難しいだろう」という、すれ違いが生じている可能性も示唆されました。

＜今後の展開＞

本研究は、市民に人生会議/ACP の意図や方法が伝われば、意欲的な反応が得られるという視点を提示しました。今後は、行政や医療機関から市民へ具体的な情報提供で人生会議についての認識のギャップを埋めていくことや、経験のある市民を語り手とした市民間の対話の場づくりも効果的な取り組みになると考えられます。

＜発表雑誌＞

Journal of General and Family Medicine (https://doi.org/10.1002/jgf2.70084)

＜論文タイトル＞

Perspectives of Japanese Citizens on Advance Care Planning in Clinical Settings: Findings From a Focus Group Study
（医療機関でのアドバンス・ケア・プランニングに対する日本の市民の視点：フォーカスグループインタビュー調査の結果）

＜著者＞

阿部路子、番匠千佳子、井上真智子

＜研究グループ＞

浜松医科大学　地域家庭医療学講座

＜本件に関するお問い合わせ先＞

浜松医科大学　地域家庭医療学講座　特任教授　井上真智子
メール：machiko@hama-med.ac.jp　　電話：053-435-2416

＜参考資料１＞　人生会議手帳についての情報

・浜松市のホームページ
https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kourei/acp.html

・人生会議手帳1：元気なうちから活用する手帳
https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/88983/jinnseikaigitetyou1.pdf

・人生会議手帳2：人生の最終段階が自分ごととなったら活用する手帳
https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/47302/3tetyou2.pdf

＜参考資料２＞　一般向けの易しい解説

「人生会議(ACP)、実はみんな話したい？」市民の気持ちを聞いてみました

浜松市では、人生の最終段階に向かう患者さんとご家族、医療者とで治療やケアの希望を話し合

う「人生会議（ACP）」 に役立てるための手帳を作っています。浜松医科大学は今回、新たに開発された「人生会議手帳2」について一般の方がどのように感じるかを調べるために、15 名の市民に集まってもらい、意見を聞きました。すると、多くの市民は 「元気なうちに家族と話しておきたい」 と前向きな姿勢を示しました。新しい「人生会議手帳2」も、「家族と話し合うきっかけになる」と好評でした。

一方で 「医療者は忙しくて、話を聞いてくれないのでは？」「緊急時でも自分の希望に沿った対応をしてもらえるよう、施設間でも情報は共有されるの？」 という不安も聞かれました。これまでの調査では、医療者の視点から「患者や家族が話したがらない」ことが課題として上がっていたのですが、実は市民の側は「医療者は忙しいだろう」と遠慮している、というすれ違いが起きている可能性が見えてきました。

今回の結果は、人生会議（ACP）を進めるには、市民と医療者が互いの思い込みを解いて、その意図をしっかり確認することが出発点になることを伝えています。人生会議(ACP)は、誰しもいつかは直面することになるテーマです。今回紹介したような手帳を使いながら、家族や大切な人と少しずつ話すきっかけを作っていけると良いですね。